



「学びの力が未来を変える」

〔大阪府〕

大阪府立水都国際中学校 3年 加賀美 さくら

「ここ、教えて。」

小学5年生になって間もないころ、私はふいに声をかけられた。振り向くと、透き通るような肌を少し赤らめた少女が、算数の教科書を私に差し出していた。彼女は侵攻が始まる前のウクライナから、両親の都合で日本へやってきた外国人だった。私たちと同じ学校に通っており、一見すると勉強する環境は整っている。しかし、いくら努力しても日本語は難しく、算数の授業でさえついていくのは大変だったようだ。教室や教科書があっても、言葉や文化の壁は高く立ちはだかっていたのだ。やがて私たちは仲良くなり、放課後に一緒に教科書を読み解くようになった。私はできるだけ簡単な日本語で授業に関係する言葉を教えた。だが、逆に私の方が彼女から学んだものは大きかった。一生懸命に理解しようとする彼女の姿からは、「どんな場所でも、どんな環境でも学びたいという気持ちは世界共通だ」ということを強く教えられたのだった。

この経験をきっかけに、私は「学びの機会を守ること」の大切さを強く意識するようになった。中学入学時、ザンビアの小学生の教育を支援する活動を知った。私は「遠く離れた場所でも、自分にできることがある」と感じ、迷わず参加した。この活動では、現地の小学生に全国から集めた計算カードや足し算・引き算の問題集を送り、返却された答案を採点する。驚いたのは、ザンビアの子どもたちの多くは小さな棒のようなものを紙に一本ず

つ書いて計算していたことだ。二桁の計算でも数十の棒を書き、最後まであきらめずに数え続ける。びっしりと小さな棒で埋め尽くされた答案を見て、私は言葉にならないほどの感動を覚えた。日本から遠く離れていても、やはり「学びたい」という意欲は同じだった。

そして、日本の中にも学習に困難を抱える子どもは多い。厚生労働省によれば、2021年には9人に1人が相対的貧困の状態にあった。義務教育や衣食住は一定程度保障されているため「目に見える貧困」は少なく感じられる。しかし、教育格差は進学率や就職先に影響を与え、貧困の連鎖を生み続けている。

私はこのような教育の現状を少しでも変えたいと思い「SDGs17: パートナリーシップで目標を達成しよう」の精神に則り、学校で国際部を立ち上げた。募金活動やさまざまな支援活動を通じて、世界中の子どもたちの学びの環境守り、未来へとつなげるために貢献したいと考えている。さらにもっと多くの同世代の若者たちを巻き込み、その輪を世界中へと広げていきたい。一人の力は小さいかもしれない。しかし、その小さな意識と行動の積み重ねこそが、未来へ学びをつなぎ、平和で幸せな世界をつくる原動力になると信じている。

「ありがとう、教えてくれて。」

彼女のその一言は、今でも私の中で響き続けている。